

旅する 会津型



喜多方市
文化芸術
創造都市
推進事業



令和6年度 喜多方市文化芸術創造都市推進事業
「ひろがる」みんなの会津型プロジェクト

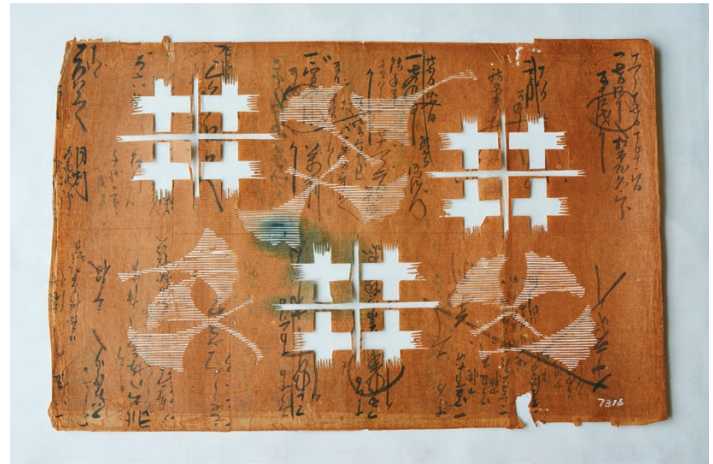
旅する 会津型

この本は、東北や地方において染型紙がどのように大切にされているのかを調査した記録です。

喜多方市にはさまざまな歴史文化資源があります。そのひとつである「喜多方の染型紙『会津型』」。喜多方の染型紙の歴史のはじまりは明らかになってはいませんが、現在の三重県鈴鹿市から伝わったことがきっかけだと考えられます。そして、喜多方からさらに東北地方へ行商されました。土地から土地へ旅をする型紙のように、各地の型紙文化を知ること、会津型がこれからも多くの方にたのしんでもらえるものであり続けるためのヒントを探す旅に出ました。

喜多方の染型紙「会津型」（福島県指定重要有形民俗文化財「会津の染型紙と関係資料」）は、江戸後期から昭和初期（一七八九頃～一九三五頃）にかけて、喜多方市内の小野寺家を通じて販売・製造されました。染型紙とは、数枚の和紙を柿渋で貼り合わせた「渋紙」に彫刻刀で柄が彫られたもので、主に布などに柄を染め出すために使われる道具です。

小野寺家は、染型紙の販売網を東北一円に広がりますが、昭和10年代には型紙商としての歴史に幕を閉じます。小野寺家の蔵に残された染型紙や関係資料など約三万七千点は市へ寄贈され、調査・整理等を経て、平成15（二〇〇三）年に福島県の文化財に指定されました。



会津型は、かつての喜多方の暮らしを垣間見せてくれます。柄、素材、技術、歴史、さまざまな視点から背景にある物語を紐解くと、美しさ、おもしろさ、奥深さといった感動に出会わせてくれます。

小野寺家による 型紙「販売」・「製造」の歴史

「販売」の歴史

小野寺家本家の墓碑（岩月町稲田）には「形屋」など一見して職業のわかる戒名が彫られています。最も古いもので寛政期（一七八九～一八〇〇）に遡るため、この頃にはすでに型紙商人としての歴史が始まっていると考えられます。

「製造」の歴史

小野寺家は、「形屋」として伊勢型紙※の仕入れを行う一方、型紙の「製造」にもあたってきました。いつからその歴史が始まったかは定かではありませんが、次の記録から自家製の型紙や型紙彫師の存在が見えてきます。

小野寺家蔵の文書には、安政3（一八五六）年に同家が例年通り仙台領で型紙の商いをしようとしたところ、その荷を差し押さえられたことが記されています。仙台藩では、その前年に自国の型紙産業振興を図るため、伊勢を除く他国製造の型紙の販売を禁止しており、特に会津と越後を名指ししている

ことから、少なからず会津産の型紙の存在を認識していたと考えられます。荷を差し押さえられた際、小野寺家が「伊勢型紙と地型（会津型）では雲泥の差があり、会津産の型紙は持ち込んでいない」と主張したのは、とても興味深いエピソードです。

また、安政4（一八五七）年に小野寺家が会津藩の御用達を拜命した際、その祝宴に「形切八次郎」という人物を招いています。「形切」は型紙彫師のことであると考えられ、これらのことから遅くとも19世紀半ばには型紙の「製造」も行っていたことが推察されます。

※伊勢型紙：江戸時代中期に現在の鈴鹿市白子・寺家地方が紀州藩領となつて以降、伊勢型紙販売商人たちは藩への莫大な貢加金の献上と引き換えに行商上の数々の特権を得て、江戸時代後期に質・量ともに最盛期を迎えます。この独占体制は明治時代以前まで続き、伊勢型紙は全国の染屋に結びついた行商により、発展していきました。明治時代以降、素材や技法の様々な技術革新に伴い、その時々の嗜好や流行に合わせて大きく変化していません。

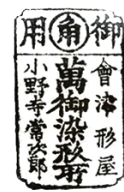
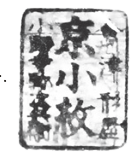
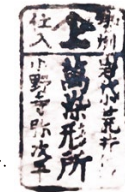
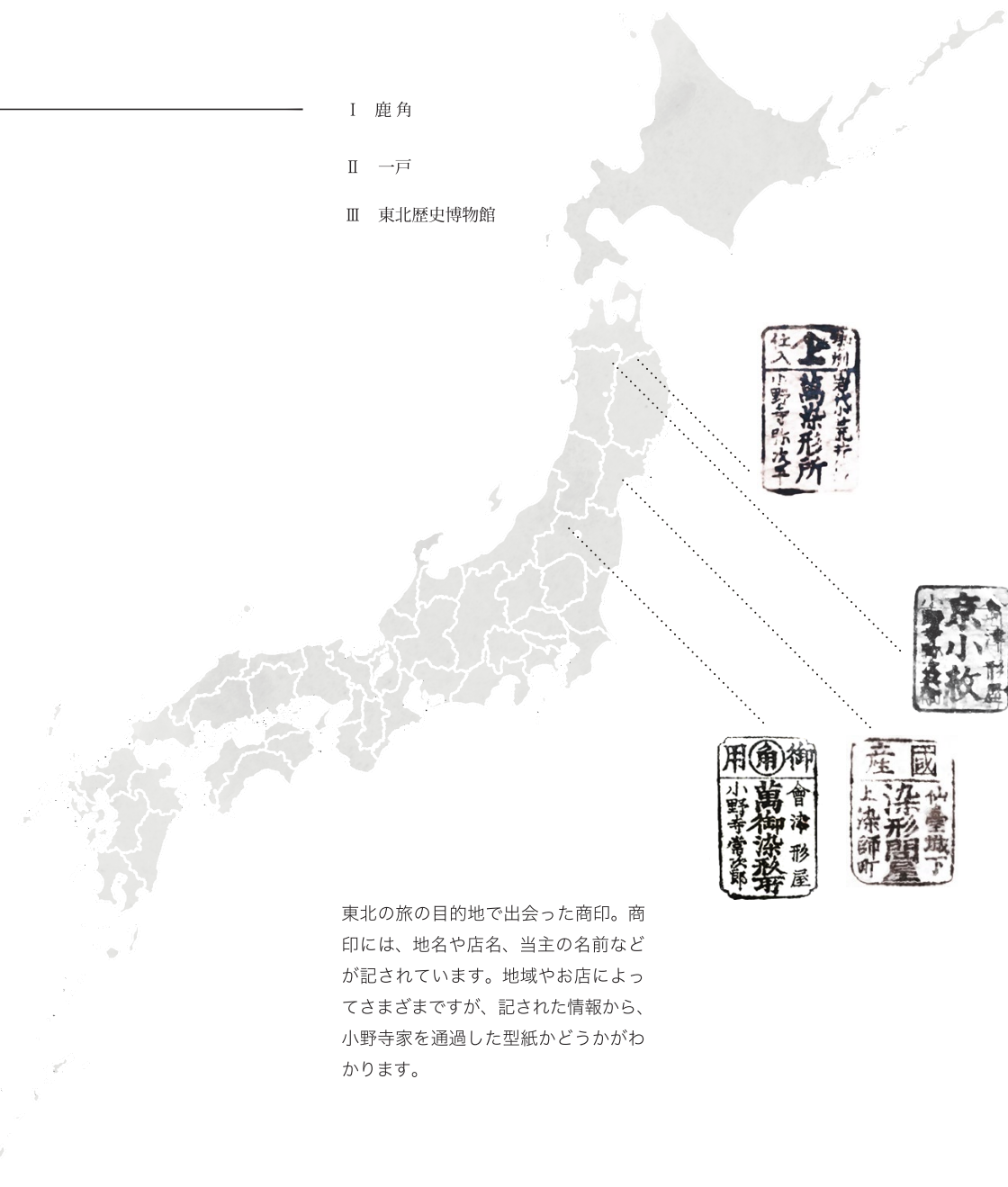
○1 東北にのこされた会津型

「旅する会津型」は、型紙に捺された商印からはじまりました。

商印とは、型紙が販売されるときなどに捺された産地などを表す判子のことです。必ずしも生産者を表すわけではなく、行商の途中で通過した地域で捺されている場合もあります。代表的な型紙販売商の商印を日本各地で見ることができ、遠く離れた場所で同じ印が見つかることもあります。肉眼で確認できないものは、赤外線を当てて調査します。

東北各地に残る会津の商印入りの型紙。それらが現代においてどのように保存・活用されているのかを知り、各地域とのネットワークを築くこと。それが「旅する会津型」の出発点でした。東北の染屋における会津型の流通や、型染め文化に与えた影響を探るために、会津型の行商の足跡をたどりました。

- I 鹿角
- II 一戸
- III 東北歴史博物館

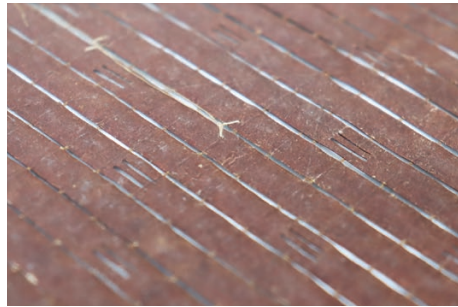


東北の旅の目的地で出会った商印。商印には、地名や店名、当主の名前などが記されています。地域やお店によってさまざまですが、記された情報から、小野寺家を通過した型紙かどうかわかります。

kazuno

鹿角

秋田県鹿角市指定有形民俗文化財「藍染の型紙」



糸で補修された型紙。

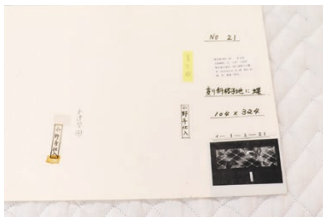
紙は染め屋さんで使われていたものが寄贈されました。それがよくわかる痕跡があります。撮影しながら観察すると、糸で縫い付けたものが見られました。紙を糸で縫うと聞くと、少し不思議な感じがするかもしれませんが、実際に目で見てもこれで大丈夫かしらと思えます。しかし、破損してしまつた型紙を絹糸で補修するのは、染め屋さんではよくあることだそうです。この修復の跡のある型紙は、実は会津型にも見られます。これは染め屋さんからの「同じ柄を彫ってほしい」といった型紙の彫り直しの依頼で、使用後の型紙が持ち込まれたなどの理由が考えられます。糸で修復された型紙は、大切に使われてきた証拠であり、型紙の丈夫さも感じられ、昔のものづくりの良さが詰まっています。

51枚の型紙を見せていただいて、その見た目も「会津型」とは少し違う感じがしました。なんだかきれいなものが見えます。「会津型」には、型紙としては販売されないまま残ったものが見られます。型紙を彫りや

秋田県鹿角市は、秋田県の北部にあり、青森県に程近い位置にあります。花輪祭の屋台行事や縄文遺跡の大湯環状列石など、ユネスコ無形文化遺産3件と世界遺産1件があります。小野寺家の商印の捺された型紙を目指して、喜多方から新幹線とレンタカーを乗り継いで7時間。「東北に行商に出ていた」という距離感を肌で感じられるような気がします。

ご担当いただいたのは、鹿角市教育委員会の工藤さんと丸岡さんです。「型紙の専門ではないんですが」と言いながら、準備してきたたくさんさんの質問に答えてくださいました。型紙は中性紙という長期保存に適した紙でできたファイルに挟まれ、柄や商印の種類、サイズなどをラベリングして丁寧に保管されていました。ファイルを開くと、ついに鹿角に辿り着いた型紙とご対面です。許可をいただいて一枚一枚撮影させていただきました。会津型との違いが見えてきました。型紙の販売と製造をしていた小野寺家に残っていた『会津型』と違って、鹿角の型

わかりやすいファイルの表記。



お話しくださった丸岡さん(左)と工藤さん(右)



info

秋田県鹿角市「藍染の型紙」

- 市指定有形民俗文化財(名称「藍染の型紙 586枚」)
- 鹿角市教育委員会 所蔵
- 調査報告書 平成 27(2015)年発行(調査対象：うち 537枚)

鹿角市文化の社交流館
参照：<http://hanawasiminn.web.fc2.com>

鹿角の型紙は、2枚以上の型紙を使って柄を染め出す「追っ掛け」と呼ばれる種類の型紙が多くの割合を占めていました。一見何を表現している柄かわからないほど複雑な追っ掛け柄も多く見られました。



綺麗に整えられた角にも注目です。

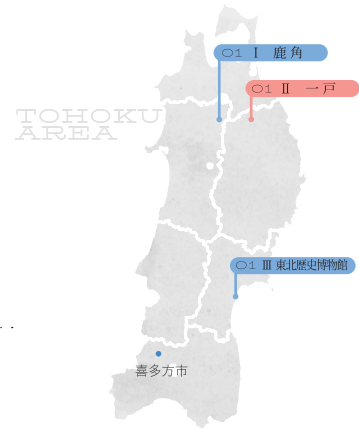
左側は「小林改仕入」の印。右側は、小さな印で「京小紋」の商印を消しているように見えます。この商印を消した跡は一戸の型紙にも見られます (p13)。



商印「会津 形屋 小野寺安兵衛」。小野寺家当主・安兵衛は、鹿角に残された型紙の商印から確認できた存在です。鹿角の型紙のもとの所有者である奈良家の営業年代は明治初期までであることから、入手時期の下限がある程度特定できます。

すくするため下に敷いて一緒に彫り抜く「あて紙」と呼ばれるものや、型紙の縁が切り揃えられていないものも多く見られるなど、一軒の型紙商としての商売であることとその繁栄を物語っています。一方、「売り物」として秋田までやってきたものは、縁が切り揃えられ、彫りも丁寧に見えます。柄のバランスもよく、派手すぎず、華やかさもありません。見栄えがするものを残しておいた可能性や、染め屋さんの好みもあるもので、一概に鹿角の型紙の特徴とまでは言えませんが、小野寺家の商印の押された型紙が襟を正しているように見えて、「がんばったんだねえ」と言いたくなりま

した。
“違い”をみることで、語れるようになる。それはこの旅で得たいものの一つでした。同じルートを辿った型紙の、柄や見た目だけでなく、どこにあるのか、収蔵までの背景など、その違いのなかにお互いを語れる手がかりを探すこと。きっとそこに「会津型らしさ」があるはずですよ。



ichinohe

一戸

「南館家の型紙」



— 遺跡にある復元された竪穴式住居。

用いて行う伝統的な型紙を使った染色技法で、準備も手間も必要です。「何日かけるんですか」「講師の先生を呼ばれるんですか」と、つい質問攻めにしてしまいました。初めは講師の方に来ていただいて、ノウハウがわかってくると職員のかたが担当するようになり、少しずつ作り上げて行ったそうです。その流れで、話題は縄文をテーマにしたワークショップへ移ります。縄文人の食事を模した猪肉などの食材を縄文土器を模して作った鍋で煮てみるなど食べたり、森から採取してきた素材で編み組み細工を作ってみたり、さまざまなプランがあります。驚くことに、鍋の材料を参加者と森へ探しに行ったり、網み組み細工の材料は職員さんが森から採ってくるのとこのこと。手のかかるワークショップを自前で準備する、材料を山に採りに行く。その大変さを想像せずにはいら

岩手県一戸町の型紙を訪ねて、御所野縄文博物館へやってきました。その名の通り、館のメインテーマは縄文です。整備された遺跡のすぐ脇に建っています。早めに着いてしまったので、縄文時代の建物が復元されているエリアを散策させてもらいました。森に囲まれた集落跡には芝が敷かれ、掘立柱建物と、竪穴式住居があります。住居はほとんど土で覆われていて、地面と繋がって小さな丘のように見えます。中に入ってみると、焚き火のような匂いがしました。もう一度外に出ると、草と森と空が広がっていて、現代のものは遠くの方で働いている芝刈り機だけです。「縄文時代の風景はこんなふうだったのかな」と、この景色を見た多くの人の頭に浮かぶことでしょう。

待ち合わせの時間になったので、博物館の中へ。山田さんと後藤さんにお話しいただきました。お聞きしたかったことの一つ、型紙の活用についてお伺いすると、型染めのワークショップを行っているそうです。型染めは、餅米などから作られる「糊」を

れません。これだけの内容を実現させるのは、「文化を楽しんでもらいたい」という気持ちの強さであるように思えます。

インタビュの後、型紙を見せていただきました。薄葉紙という文化財の保存に使われる紙に包んでケースに収められています。山田さんが、なんとなく説明してくるうちに「うちの型紙はなんとというか、表現が拙いものがあるんです」と、言いながら包みを開いていきます。確かに、破れて使えなくなってしまうような型紙もありますが、それとは違った趣の、刃物を扱いは慣れていない人が彫ったように見えるものがあります。この型紙が寄贈された所以は、型紙商でも染め屋でもない方から寄贈されたそうで謎が多いようです。「なんだか練習したあとにも見えますね」「型紙彫りを始めようとして集めていたのかも?」「会津型にはこんな感じ

info

岩手県一戸町「南館家の型紙」

- 文化財未指定
- 一戸町教育委員会 所蔵
- 調査報告書 平成 15 (2003) 年発行『いちのへの型紙Ⅱ』



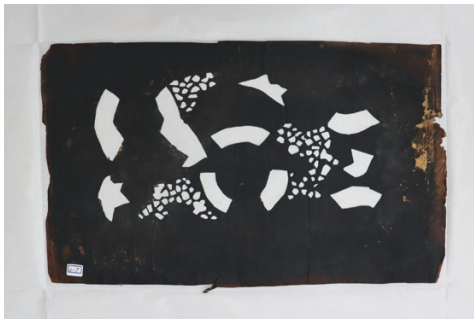
御所野縄文博物館



— 一戸の不思議な型紙その1。
 わざわざ彫られた「ツ」。「墨書」と言って、
 墨などで彫り師の名や制作時期などを書き示
 す例は見られますが、これは彫られています。
 柄の部分から離れていて、染める際に役割が
 あったものとは考えにくいです。



— 一戸の不思議な型紙その2。
 よく見ると下絵の花は、花卉の先がギザギザ
 していて桜か何かのようですが、曲線や細部
 を彫るのに苦労したようで角ばった花になっ
 ています。



— 一戸の不思議な型紙その3。
 こちらも頭張って彫ったことが見てとれま
 す。線が滑らかでなく、隣の柄とくっついて
 しまっているように見えます。
 型紙の状態も、染めに使用したものは黒く変
 色することが多いですが、その場合、左下
 に見られるような塗料が剥がれたような跡で
 はなく、全体に色素が染み込んで見えます。
 型紙の縁も切り揃えられていないタイプ。

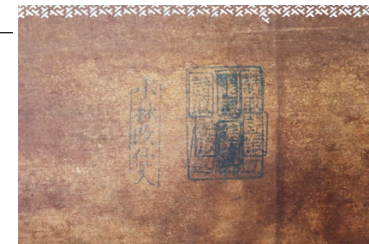


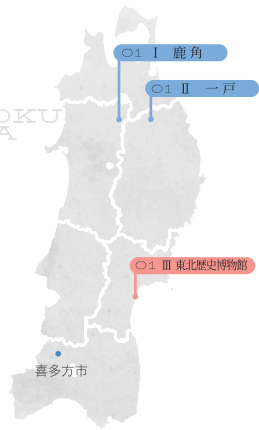
— そっと薄葉紙を開く
 山田さんと後藤さん。

のは残されていないです」と、型紙話の花
 が咲きました。文化財を真ん中にして輪に
 なって「おもしろいね」と言い合う時間は、
 文化をたのしむってこういうことだ、型紙
 のネットワークが広がって、こんな場面も
 もっと広がっていくといいな、と夢が膨ら
 みます。学芸員の後藤さんは、2枚まどめ
 て包まれていた型紙を見つけると「これは
 学芸員魂が許さない」と、新しい薄葉紙
 を持ってきて包み直していました。型紙を
 大切に扱う仕事も、文化財—文化を大切に
 思っている姿に見えてきます。

旅の目的は「型紙の活用についての調査」
 ではありませんが、足を伸ばして見にい
 と、ハツとさせられる出会いがありました。
 文化を大切にする気持ち、そしてそれを多
 くの人にたのしんでもらいたいという気持
 ち。本事業は、身近に文化財を楽しむま
 ちを目指して始まりました。「身近に文化財を
 たのしむ」とはどういうことか、大切なこ
 とを思い出させてくれました。

— 鹿角の型紙にも見られ
 た、元の商印を消した
 ような商印が一戸の型
 紙の中にもありまし
 た。「小林改仕入」の
 印が左側にあるのも
 同じです。





tohoku history museum

東北歴史博物館

宮城の型紙

喜多方市



企画展の様子。技法の説明と、それに対応する型紙が展示されていました。

こでも、話はワークショップへ。
技法に焦点を当てた展示ということから、やはり型彫り体験をしたいと考えたそうですが、それは私たちの知っているものとは少し様子が違いました。職人さんが型紙を彫るときは技法のひとつに「突彫り」があります。突彫りというのは、型紙に柄を彫りだす技法の一つで、小刀をさらに細長く削ったような刃で、刃を自分と反対側へ向けてノコギリで切るように上下させながら彫り進めます。この特殊な刃の使い方は、型紙を量産する際に、紙を6枚ほど重ねて彫るのに適しているということから用いられます。下まで貫通させるために穴を開けた木の板を下敷きのようにして彫ることも特徴です。これらは、自由な曲線で構成される複雑な模様を彫ることを可能にします。小林さんは、「ちょうどワークショップ用に準備していたのですが」と、展示などで使い捨てにする発泡スチロール製のパネルに画鋏で渋紙を貼り付けたものとデザインナイフを持って来てくれました。渋紙には

次は、東北歴史博物館を訪ねます。型紙の技法についてのテーマ展が開催されていたので見学をお願いしました。展示を担当した小林さんが案内してくださいました。展示では、型紙を彫る4つの技法についての説明と、その技法を用いて彫られた型紙が並べて紹介されていました。大きなガラスの展示ケースには、型紙の隣に同じ柄の着物が展示されていました。会津型で、型紙と完全に一致する染め上がりの資料はまだ見つかっていないので、思わずどういう経緯のものか質問すると、なんと、収蔵している型紙を使って染めたものだそうです。「昔は研究費も豊富だったんでしょね」と、小林さんも驚いたように説明してくださいました。

バックヤードにお邪魔して、所蔵している型紙についてお話を伺います。現在、所蔵されている型紙のコレクションは5件もあるそうです。整理・データ化は一通り完了しているそうで、東北の型紙のこれからの可能性に期待がふくらみます。そしてこ

info

宮城の型紙

「新田家」「最上家」「富倉家」「菅原家」「庄司家」

- 文化財未指定
- 東北歴史博物館所蔵
- 「新田家」についての調査報告：昭和63(1988)年発行



東北歴史博物館

「突彫りワークショップ」のためのセット。小林さんも、ワークショップのために練習されたそうです。後日、喜多方市内で会津型を楽しむイベント「きたかた会津型ウィーク」で突彫りワークショップの講師を担当してくださいました。参加者のなかで型紙彫り体験をしたことがあった方も「こんなにも違うんだ」と喜んでくださいました。



常設展で展示されている型紙に「国産 仙台城下染型問屋 上染師町」の商印が見られました。店名ではなく町の名前の商印です。かつて仙台には上染師町と南染師町がありました。上染師町の名はなくなってしまいましたが、住民の方の働きかけもあり、「南染師町」が今も残っています。



常設展の様子。

御所野縄文博物館と東北歴史博物館、ふたつの館のワークショップの丁寧さと充実ぶりに、もつとできることがあったのかもしれないとショックを受けながらも、ぜひその心意気を取り入れていきたいと思う帰路でした。そしてまた、それぞれの土地の型紙への向き合い方が見えてきました。今回は、「型紙の活用」を主なテーマにしていますが、やはり型紙そのものも、「地方の型紙」という、中央の派生ではありながらも、資金や環境、人材、さまざまなものが違った条件のなかで作りに上げられた工夫やたくましさ、文化と人の暮らしとのつながりが見えてきたら面白いのではと、期待せずにはいられません。



小林さん。

図案が印刷されています。突彫りの特殊な刃の進め方を実現するのに知恵を絞った結果、この形に行き着いたそうです。「よかつたらやってみてください」と、促され、彫らせていただきました。「上下に動かすのがコツですよ」と教えていただくと、少しずつ彫りやすい動かし方がわかってきます。いつもの型彫り体験で慣れていた刃の扱いも新鮮です。知っていたけれど実際に見ることはないだろうと思っていたものに出会ったような気持ちで、「突彫りで彫っている」ということに妙にうれしくなりました。

い素材でできた下敷きに紙を載せてデザインカッターで彫ります。刃を手前に向けて進めるカッターを使うときの切り方です。「突彫りは職人さんの使う刃物（鋼という金属の塊から、職人さんが手作りします）でないといけない」と、気軽にやっていいものではないというような気持ちもありましたが、なぜやってみようと思わなかったのか、目から鱗が落ちました。小林さんは、職人さんの技法をなんとか共有したいという気持ちから、インターネットなどで職人さんが彫る様子を調べて考察したのだそうです。展示のテーマからブレない姿勢が新しいかたちを作り出しました。

かつて型紙商の顧客は各地の染め屋でした。農家で育てた木綿などを紡いで糸にして布を作り、自家で染めることもありましたが、染め屋に頼んで衣類やのれんなどを染めていました。型紙について考える上で、欠かすことのできない存在です。

文化財「会津型」がこれからも楽しんでもらえるものになるために、伝統的なものが現代でどのように活かされているかも学びたいと思っています。東北の型紙を調べるなかで見つけた、型紙と縁の深い染め屋さんのお話を伺いたいと考えました。

現在も染め屋として生業を続けていて、社会や環境が変わっていくなかで伝統的なものを大切にされている染め屋さんにお話を伺いました。

I 小野染彩所

II 永勘染工場



東北古代型染
小野染彩所



永勘染工場

ono sensaishyo

小野染彩所

南部の染め屋

小野染彩所の2階には、所狭しと展示物が並べられた展示室があります。型染めについての資料や、甲冑に瓦、江戸時代の染めの見本帳の向こうには、外国で手に入れたらしい布や織物が手書きのキャプションとともに並んでいます。小さなガラスケースの奥にある旗には、「向かい鶴」の紋が描かれています。2羽の鶴が向かいあった模様は、南部藩の家紋であったことから地域で大切にされ、様々にアレンジされたそうです。瓦や刺繍、そして型紙の柄にもなりました。歴史の詰まった空間でお話をしてください。代表の小野信明さんです。

小野染彩所では、型彫りから染めまでの工程をほとんど自社で行っています。かつて周辺にあった染め屋のなかでも、そうした染め屋は小野さんだけだったそうで、その土地土地で自分たちの方法をつくっていくたくましさは、会津型に通じるものがあります。現在も小野さんが型彫りをされています。何度も染めに使って傷んでしまっ

info

小野染彩所

- 南部古代型染元
- 「盛岡小さな博物館」店舗2階 資料室 営業時間内に見学可能

岩手県盛岡市材木町10-16



向かい鶴がデザインされた瓦はお城のものだそうです。



た型紙もとっておいて、次のデザインの参考にします。受け継いできたものを大切にしながらも、「新しいものを取り入れていかないと固まってしまおう」とおっしゃいます。代々伝わる型紙をもとに、柄の組み合わせや大きさをデザインし、そしてどう染めるか、どんな柄が必要とされているのかを考えながら工夫を凝らしてきた日々の積み重ねを感じる言葉です。

店舗に並ぶ色とりどりに染め出された商品は、型紙がひとつひとつの暮らしを豊かにしてきたことを改めて感じさせてくれるものでした。向かい鶴の柄も、藍色やピンクなどさまざまな色に染め出されています。受け継ぐものと、新しい変化を取り入れるのだと教えてくれました。



スペースに収まり切らず—
重なり合う資料たち。貴重なコレクションは先代が集めたものだそうです。

会津型にも「向かい鶴」の柄があります。この向かい鶴は、会津型の彫り師で唯一氏名の判明している小林豊八氏によるものです。彫りの仕事の傍ら、行商にも出ていたそうです。豊八さんの向かい鶴は、やさしい線のかわいらしいデザインです。



店舗に並んだ商品。
この中にも、黄色と藍色の向かい鶴がいます。

お話しいただいた小野さん。小野染彩所を訪ねたのは旅の初日でした。型紙という文化財を現代でどのように楽しめるかがテーマの旅のはじまりに、「新しさも必要」と、心強い言葉をもらうことができました。



Nagakan Dyeing Factory 永勘染工場

仙台の染め屋



作業の様子を見せてくださった猪俣さん。
布に型紙を使って防染のための糊を置き、しっかり乾かしたあと、染料をハケで塗る「引き染め」。糊の端までしっかり色が入ったか確認しながら進めます。



かつて糊を落とししたりするために使われていた水路。草が生えていますが、階段が昔の姿を偲ばせます。昭和の中ごろまではこの水路沿いにたくさんの染め工場がありました。

仙台駅から電車で10分と少し、そこからまた川に沿って10分ほど歩くと永勘染工場に着きます。染めには水が必要だから、やはり水のあるところにお店があるのかと思っていると、おしゃれな暖簾のかかったお店が見えてきます。

今日は工場を見学させていただきました。職人の猪俣さんが作業をしながら「手捺染」と「引き染め」の様子を説明してくださいました。型染めの説明をしながらも集中して作業する様子に、こちらも緊張しながら見守ります。いつの間にか現れた関係者らしき人が、作業を手際よく手伝いながら、仙台藩時代の染め屋さんの歴史を語り始めました。先ほど川だと思って歩いてきたものは人工の水路で、江戸時代に大雨が降ったとき水が流れた場所に作られました。土地が低く、水の流れに無理のないように作る知恵です。仙台藩主であった伊達政宗の臨終により、これまで染め屋さんがあった場所の近くに御廟が建てられたことをきっかけに、藩のお抱えの染め屋たち

info

永勘染工場

- 伊達政宗が設置した職人町のひとつ「染師町」に残る唯一の染物屋
オーダーメイドによる布製品の製造・販売

宮城県仙台市若林区南染師町 13



は、水の豊かなこの地へ移されました。そのとき「上染師町」と「南染師町」の二つがつけられました。当時から、仙台では染め屋のことを「染師」と呼んでいたことから、このまちの名前がつけられました。江戸時代に生きていたかのようにお話しされるこの方は、会長の永野仁さんでした。

永野さんが「染師」となった50年ほど前は、すべてが手作業でした。同じ名前の紋でもデザインが少しずつ違っていて、ひとつひとつ修正しました。大きさを変えたいときは、碁盤の目状のマス目の入った紙を使い、柄を写すときはトレーシングペーパーの代わりに薄い和紙に下絵を描いて、火鉢で溶かした蠟で渋紙に張り付けて型紙を彫ったりしたそうです。拡大コ



永野さんが渋紙に彫った型紙を見せてくださいました。蛸と菊の校章でしょうか。



ピーというものが出来たときはなんて便利なものができたんだと驚いたとおっしゃいます。そして現在は、画像ソフトで図案の拡大縮小は自由にでき、し、家紋は専用のソフトで制作されるようになりました。そんな大きな変化のなかで、永野さんは40年前からいち早く染めの仕事にコンピュータを取り入れたそうです。まだ「パソコン」すらない時代です。

聞くと、こどもの頃、ラジオを見て「どうして音が鳴っているんだろう」と疑問を感じ、自分で分解してどうなっているか調べるような、自分の興味のあることはやってみてしまう永野さん。最近では、真空管アンプづくりを始めたそうです。山も登るし、サイクリングもする。でも仕事の話に戻ると、「肝心

な手仕事のところを残しながら守る」と、昔ながらの染めの技術を残した商品作りや昔のままの姿をなるべく残した工場について誇らしそうに語られます。

永野さんのスピード感に圧倒されて、一見小野染彩所さんと真逆に見えましたが、どちらも受け継いだものを大切に、新しいことを取り入れ続ける姿勢は同じです。コツコツ積み重ねる改革もあれば、好奇心にまっしぐらに進んでいく姿もありました。伝統的な技術の商売を長く続けるには多くの苦労があったかと思われませんが、自分らしく新しい時代を受け入れながら戦ってきた姿はそれぞれに美しいものでした。



帰り道、駅まで送ってくださった永野さん。川沿いにいくつもあるマンションが染め工場の跡地に建てられたことや、駄菓子屋さんがあったことを聞きながら歩きました。途中、お孫さんに偶然出会いご挨拶。書籍だけでは味わえない昔ながらの時間を残したまちの雰囲気を感じることができました。

商印を手掛かりとした東北の型紙や型染め文化に限らず、もう一つ知りたいことがありました。伊勢や京都、江戸といった大きな産地—メインストリームではない地域の型紙文化です。かつて型紙は伊勢を中心とした藩による優遇や規制のなかで発展しました。人口の集中していた京都や江戸は型紙文化の発展にとって重要でした。しかし、会津型には喜多方という地域ならではの知恵と工夫によって、たくましく型紙文化を培った痕跡が残されています。そのことから、他の地域の型紙文化こそ、より喜多方らしい型紙のアイデンティティや、これからの活用のヒントが得られるのではと考えました。そうして次の行き先が決まりました。



シルクスクリーン印刷で作られた型紙。



古い型紙も見せていただきました。表面からも反故紙が使われているのがわかります。



取り出すのに苦労するほど箱でいっぱい収蔵庫。



染料の配合の記録。微妙な色合いは職人さんの努力の賜物です。



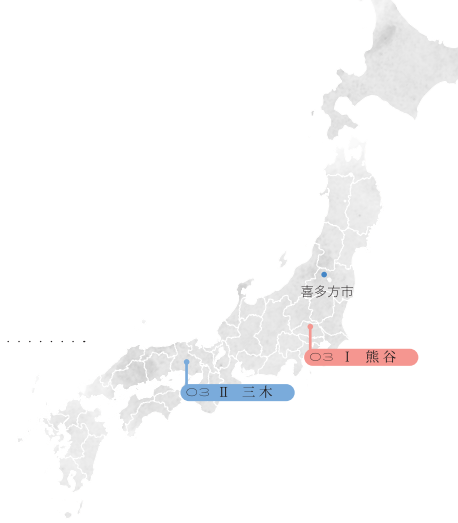
いつか新しい職人さんに使われるかもしれない道具たち。

づいたり、ひっくり返したりしてわあわあ言いながら盛り上がります。そうしていると次々に資料が出てきます。洪紙に彫られた熊谷の型紙、半透明の紙にカラフルなペンで手描きされてキラキラと光っている図案たち、市立熊谷図書館の大井さんが自分の時間を使ってインターネットオークションで落札した熊谷染の着物。そのまま収蔵庫に移動して、パズルのように積まれた道具をよけながら、さまざまな画材で描かれた絵画のような図案や、現在の写真製版技術の元となる技術の特許を取った岸家から寄贈されたというレースのような「スクリーン型紙」も見せてくださいました。そんな資料が詰まった段ボールの箱が所狭しと積み重ねられている収蔵庫の、熊谷染という産業文化をまるごと保存しようとしているかのようなそのあり方には、理由がありました。

収蔵庫に収まりきらない道具たちもまだまだあります。最近寄贈されたという工場で使われていた道具たちは、職人さんの道

kumagaya 熊谷

熊谷染



熊谷は埼玉県の北部にあり、江戸時代には宿場町が置かれ、古くから交通の要衝として栄えました。熊谷の型紙は、着物を中心とした染めものの製産に伴っていくつもの工場ができ、産地として発展しました。下請けであったことから、その名前が知られることは多くはありませんでしたが、時代の流れとともに、染め屋が減ってくると、その文化を残すために「熊谷染」の名称がつくられました。熊谷では、伝統的な洪紙で作られた型紙から、もう少し現代に近づいた型紙文化に触れました。

「熊谷染」の型紙を所蔵されている熊谷市立熊谷図書館にお邪魔しました。出迎えてくださったのは、市商業観光課、図書館、文化財センターの職員のみなさんです。事務室に案内していただいて、作成された報告書などの実物を見せていただきながら熊谷市での取り組みについてお聞きしました。

職員さんがデータをコツコツ直しながら作成された熊谷染デザインのしおりなど、「手にとれるもの」を見せていただくと、近

info

熊谷染

■ 型紙関係資料

- 市指定有形民俗文化財「岸家型紙」(熊谷市立熊谷図書館 所蔵)
- 上記資料を含む 熊谷染関係資料調査報告書Ⅰ～Ⅳ 発行
- 参考サイト「熊谷デジタルミュージアム」

■ 製品や技の継承、デザイン活用

- NPO法人「熊谷染継承の会」(熊谷市スポーツ・文化村「くまびあ」)
- 市商業観光課、熊谷市観光協会
- 参考サイト「買えるくまがや ONLINE」



熊谷市立熊谷図書館

参照：
<https://www.kumagayacity.library.ne.jp/access/熊谷図書館/>

具箱をそっくり持つてきたかのよう
です。それというのも、一般的に博
物館などでは、収蔵庫も限られてい
るため、収蔵するものを選ぶ必要が
あります。しかし、熊谷では、でき
るだけ多く残すようにしている
そうです。これは、東京文化財研究
所の「お道具バンク構想」という、
伝統工芸に関わる道具を残して後世
の職人育成に活用することを目指す
事業にヒントを得たそうです。

大井さんは「日本全国で染工場が
減り続けている今、熊谷だけは市と
して技術や道具を保護し、公で残り

回転台。運ぶのも、短くするの
も大変そうな大きさ。



大久保さんの書庫には会津型の
報告書もありました。

大久保さん。



続ける仕組みを整えていきたい」と
語ります。その実現にはこれまで多
くの困難や課題があったことで
しょう。熊谷染という文化の残し方
が実現できたのには、自分の時間に
ネットオークションで「熊谷染」の
着物を探してしまう大井さんのよう
な存在が不可欠であったことは、想
像に難くありません。

翌日、大井さんにご案内いただき、
廃校になった学校を活用した体験施
設「くまびあ」で、かつて染め工場
を営んでいた大久保さんにお話を伺
いました。工場を閉じて引退されて

からも、埼玉伝統工芸士として講師
などを務められています。
くまびあは、誰もがスポーツと文
化に親しむことのできる市の施設で
す。その一室に、染めの講座ができ
るようにさまざまな設備や機械、道
具たちが並んでいます。染めに使わ
れる専用の機械は、もともと大久保
さんの工場にあったもので、市で事
業化してここに運び入れられました。
回転台と呼ばれる7メートルほどあ
る機械は、この教室に入れるために
長さを短くしたそうです。「もう
ちよつと長くしとくと反物を染める

のにちょうどよかったけど、入らなくて
半分にしちゃった」と、大久保さん。「ど
うやって運ぼうかと思っただけど、一〇〇
パーセントの助成率でポララ伝統文化振
興財団さんから助成金を出してもらえた
んだよね」と、大井さん。事業の価値が
認められたということですね。

大久保さんは、型紙の技術を開発した
り、熊谷駅の壁面にある昔の熊谷の姿を
描いた鳥瞰図の原画を型紙に起こして染
めるなど、好奇心と行動力に溢れていま
す。東北への旅でお話を伺った染め屋さ
んたちの顔が思わず浮かびます。

大久保さんの作業部屋で、小紋の染め
見本などの型染めに關する資料や、浮世
絵の実物が使用されている貴重な画集な
どを見せていただきました。これまでさ
まざまな事業に取り組んだお話を伺って
いると、大きなパソコンのモニターに作
業途中のデータが映し出されていました。

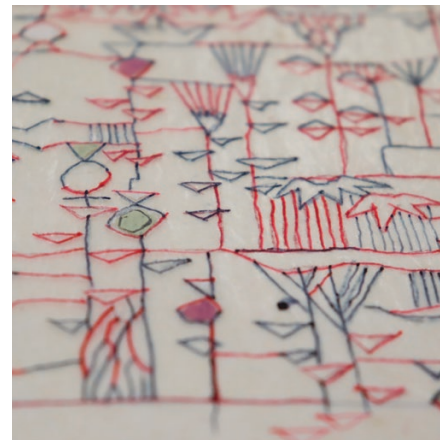
「これで型紙のデータを作ってこのレー
ザーカッターで彫ります、デザインに使

うフォントはパソコンソフトが出始めた
ころのものが使い勝手がいい」と話して
くださるのですが、にわかについていけ
ない私たち。渋紙を刃物で彫る型紙の時
代にいた私たちは、時間の流れとともに
変化した型紙に、改めて熊谷染の文化と
しての厚みを感じました。

そんな話をしている時に、大井さんが
顔を出して「大久保さんは熊谷で一番最
初にスマートウォッチを手に入れたよね」
と笑いました。大久保さんの新しいもの
好きがよく伝わる一言です。同時に、長
い間ともに熊谷染を大切にしてきた二人
の関係性を表しているように感じました。
「なんでもやっちゃう」と、まんざらでも
なさそうに返す大久保さんにお互いへの
信頼が滲んでいるようでした。そうし
た自治体のキーパーソンと民間のバラ
ンが、熊谷染をこれほど体系的に残して
いる秘訣なのかもしれません。



—大井さん。



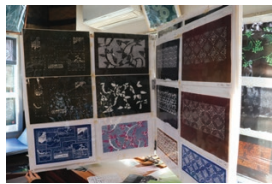
熊谷染のさまざまな図案たち。
表に出ることのなかったはずのものですが、
細部まで描きこまれていることに驚きます。



窓を埋め尽くす型紙と、型紙のコピー。

人が壁にかけられていて、棚の上にも大小のそろばんが積まれています。そこを通り抜けて一番奥の部屋へ進むと、型紙の部屋がありました。壁にも窓にも型紙が隙間なく貼られ、ページをめくるように型紙を見られる巨大なファイルのようなものも壁に設置されています。〃柄〃に埋め尽くされるようです。「緋柄がある!」「筆記体の英字やローマ数字の柄は会津型にもありました!」と、型紙の森をかき分けながら探検させていただきました。

一番見やすい場所の窓に貼られている型紙のレプリカを指して、筒井さんが説明してくださいます。戦時中の型紙と思われる柄の中には、戦争への皮肉とも取れる表現が見られます。例えば、「官許単語〇(解読できない文字)」と書かれた表紙の本に「検査」と書かれた葉が挟んであり、葉の先は釣り竿の糸で釣られています。もう一冊の本の表紙には「身体」の文字があります。「兵役にとられてしまうことへの皮肉を表現しているのでは。シャレが効いてい



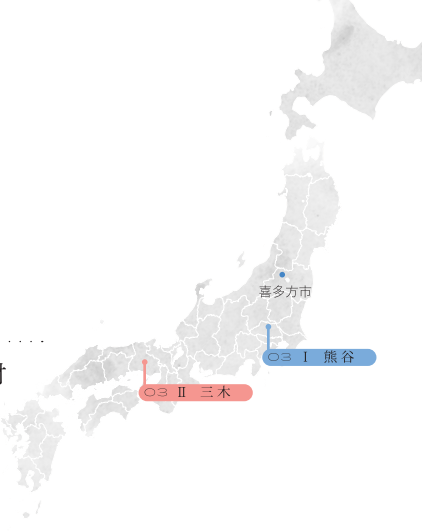
壁に取り付けられた型紙を入れる巨大なファイル。

ユーモラスな柄。酔っ払って狐に変身してしまふ話がモチーフ。



miki
三木

三木市指定有形民俗文化財
「筒井俊雄氏所蔵染形紙」



旅の最後は兵庫県三木市を訪ねました。三木もまた、歴史ある街です。京都と有馬をつなぐ大切な地点だったため、戦国時代には合戦の舞台ともなりましたが、その後は金物などさまざまなものの産地として栄えました。その一つが型紙です。

三木のキーパーソンは、郷土研究家の筒井さんです。江戸初期から大正にかけて発展した三木の型紙文化が忘れ去られそうになっていることに気づき、ご自身の足で染め屋さんなどをまわって三木でつくられた型紙を収集してこられたそうです。令和4年にその型紙が文化財に指定されました。筒井さんが運営されているギャラリー湯の山みちで型紙を見せていただきました。

外の階段から2階の入り口に入ると、そこは化石でいっぱい部屋でした。アンモナイトがゴロゴロ置かれ、さまざまな色の石に、テーブルの天板にも細長い巻き貝の化石が見えています。案内されて奥に行くと、次はそろばんの部屋があります。50センチメートルほどありそうな大きなそろばん

info

- 筒井俊雄氏所蔵染形紙
 - 市指定有形民俗文化財
 - ギャラリー湯の山みち
- 三木の染形紙
 - 三木市立みき歴史資料館、三木市立堀光美術館



ギャラリー湯の山みち

参考サイト「播州三木染形紙 WEB 美術館」

ローマ字をモチーフにした柄は会津型にも見られます。会津型も、三木の型紙も単語の意味を成していないものがあるところも同じです。右側のカラーのものは、うすみ柄（絞り染めのにじみを模した柄）の2枚型が重なった様子を再現したもの。



型紙と、同じ柄の型染めの布。



ご案内くださった三木市の金松さんと川上さんに、型紙のデザインを使用した灯籠の説明をしていただきました。

筒井さん。



て、関西らしい、他の型紙とは違うところ」だそうです。会津型の中にも戦争を題材にしたと思われる柄がありますが、兵隊が行進（大砲を撃っている？）しているような様子や、「勝ち虫」とも呼ばれるトンボがハトと戦っている様子など、戦争に関する表現にも違いが見られます。また、大津絵をデザインした柄もありました。大津絵というのは、江戸時代に関西のお土産物として流行した滋賀県大津市で生産された絵画です。細かい点線で四角い枠の中にさまざまな人物や妖怪が描き分けられていることから、紙に描かれた様子が表現されているとわかります。5ミリメートルほどの顔にはそれぞれ表情があり、ひとつひとつ見たりなります。東北の旅では見られなかった柄の特徴を見ることができました。違う地域で違う発展をする型紙は、その時代にその土地に生きた人々の暮らしを映し出しています。

一階のギャラリーでは、三木の型紙で染められた藍染の布と一緒に展示されています。

した。古道具屋さんに行って集めてもらい、布団などになっていたものはほどこいて洗うなどしてきれいにして、型紙と照合しているそうです。「このデザインは見たことがあるな」と思って照合すると、デザインの一部が違っていることがあるそうです。例えば、全体を見るとほぼ同じだけれど、よく見ると菊の花が一つ牡丹に変えられているとか、デザインは同じだけれど大きさが違うとか。デザインを少しずつ変えて効率的にオリジナルティを出したのではと、筒井さんは推察されていました。まだまだ照合できていない布がたくさんあるそうです。筒井さんの地道な活動から、三木という地域のなかでも多様化し、進化していく型紙の姿が見えてきます。今回の旅では、個人の意志なしにはできない細やかさが文化財を支える姿をたくさん目にしました。会津型もたくさんの方に支えられてきましたが、改めて、その存在を大切にしながら、文化の手ざわりを伝え、心の豊かさを共有していきたいと思いました。

この本を手にとってください みなさまへ

喜多方市では、豊富な歴史文化資源を保存・活用することにより市民の郷土に対する誇りや愛着を高めるとともに、文化芸術の持つ創造性を領域横断的に活用し地域課題の解決を図る「文化芸術創造都市」の実現を目指しています。現在、創造都市推進事業の一環として、「リ・デザイン※」をキーワードに掲げ、喜多方の染型紙「会津型」のデザイン活用を図ることで、「身近に文化財をたのしむまち」を実現し、文化芸術の持つ創造性を地域振興にいかす取組を進めています。

令和5年度『であう』みんなの会津型プロジェクト』では、2つの市民参加型事業（会津型×高校生1蔵の里リ・デザイナー、きたかた会津型ウィーク）

て「会津型らしき」を紐解きたいという思いを胸に、喜多方をスタート地点とした型紙をめぐる旅がはじまりました。

旅を通して出会った型紙にはそれぞれの歴史やストーリーがあり、地域にはそれらを伝え、大切にのこそうと取り組むひとびとの姿がありました。様々な困難がありながらも地域に伝わる道具や技術を途絶えさせないために官民協働で取り組むみなさん、体験を通して「本物」に触れてほしいという思いでワークショップを企画するみなさん、伝統的な型染めの技術をまもりながら新たな需要にも応える染屋さん。現地でお話を聞かせてくださったすべての方々に改めて御礼申し上げます。

を中心に、レベル別体験機会の充実、デジタルアーカイブ化を見据えたオープンデータの公開などに取り組みました。様々なひとや分野と出会うことで活用の裾野がひろがり、会津型の魅力や新たな姿、可能性を見ることができました。

「会津型は自由でひらかれたデザインである」というイメージがひろがることを嬉しく思いながらも、会津型のアイデンティティとはいったいなにか、文化財指定の会津型だけを扱っていても上手く言語化できない壁を感じていました。そこで、東北にのこる会津型の足跡や、地方の型紙産地の保存・活用事例を調べ、それらを比較することで、多面的な切り口から改め

他地域・他分野にひろがる「会津型」。その背景にある染型紙としての歴史や地方の染色技術について、この旅をきっかけにスポットを当てることができました。歴史資料と捉えたときに見えてくる新しい「会津型」の価値や可能性をみなさんと共有すること、これまでに築いたネットワークを活用することで、さらに多くの方々がたのしめる文化財のあり方を探っていきます。わたしたちの「会津型」を未来へつなぐ第一歩です。

※リ・デザイン：「再設計」という意味で、一度完成したものを新たなニーズや暮らしに合うように作り直すこと。デンマークの家具デザイナー「コリア・クリント」が提唱した「伝統を切り離すのではなく真摯に向き合い、新たに作りなおす」というデザインの手法にも使われる。

鹿角

- 活用に力を入れている文化財について
 - ユネスコ無形文化遺産 3 件と世界遺産 1 件が、道の駅とのタイアップイベント等を開催。
 - 文化財保存活用地域計画を策定予定。

一戸

- 御所野縄文博物館について
 - 町直営（指定管理から直営に戻した経緯）。
 - 遺跡公園内には竪穴住居跡や堀立柱建物が復元。木材や縄等の部材は当時と同じものを使用。
 - 芝刈りや週 4 回の焚火等、管理はすべて職員。
 - 遺跡の保存管理計画に基づく維持管理は大変。
- 縄文文化を楽しめる企画について
 - 縄文の雰囲気体験する様々なイベントを実施。
 - シナ・カラムシを使った樹皮編み、縄作りは周辺の森から素材を活用。売店で制作キット販売。
 - 土器の鍋作りと煮炊き体験。博物館裏の森でユリネ等を収穫し調理。ジビエ肉等子供に大人気。
- 周辺地域との連携について
 - 縄文の世界遺産に係るネットワークに参加。場所が遠いため困難。（市町村内訳：北海道 3/ 青森 8/ 秋田 2/ 岩手 1）
 - 県内では平泉（世界遺産）と釜石（近代化産業遺産）と連携したイベントを実施。

小野染彩所

- 藍染めについて
 - 藍の仕入れは徳島。
 - 材料の木灰・すくも藍は契約栽培。現在高級品。
 - 藍には虫・蛇除け効果があり、元々は野良着。
 - 基本は無地。武家や商人は柄入りや枯れた味わいを好んだ。
 - 染屋の仕事について
 - 壊れやすい型は糸入れや紗張り。
 - 自家で図案を作り型を彫ったため、会津や他所からの仕入れは不明。
 - 岩手の染屋に残る型紙は県博収蔵。
 - [会津型カタログの感想]
- 現代の感覚で緩いジャンル分けが良い。保守的な考えと新しい展開の 2 本立てで柔軟に。

永勤染工場

- 染めの技法について
 - 名入れや任意の模様为中心。ニーズに応じて。
 - 白い生地（原反）を染めてから暖簾等に製品化。
 - 半纏 1 着染めるのに約 3.6m の型枠が必要。
 - 「手捺染」「引き染め」技法。糊はかつては手作りしたが今は京都から取り寄せ。
 - 色の定着法は①アルカリショック法と②スチーム法の 2 種類。永勤は①、大規模工場は②が多い。
- 南染師町について
 - S50 頃までは仙台に染め仕事集中。
 - 政宗が岩出山（大崎市）から仙台へ移る際、多くの職人も同行。永勤の先祖もその 1 人か。
 - 伊達家の御袍染師は政宗死後、居住地近く瑞宝殿が造営されるため現在地へ移住。
 - 七郷堀沿いには染めに使われた洗い場が現在も残る。
 - 藩の受注が多く、江戸初期までは染屋の需要が多かった。「染師」は仙台藩独特の呼び名。
- 南染師町周辺の地名・まちなみについて
 - 藩政期の地名を残す運動により「南染師町」「南材木町」「畳屋町」「南石切町」等が現存。
 - かつて名取の関上港から西の物資を荷揚げし、広瀬川から船に縄を付けて引いた。「舟丁」の地名。

熊谷

熊谷市立熊谷図書館

- 手描き友禅の染屋は途絶。かつては職人 3 名。
- 小紋の業者は現在 1 軒のみ。
- 加賀友禅でさえも工場が減少し壊滅的との話。
- 市は技術や道具を保護できる仕組みを整えたい。

三木

- 昔は「形屋の〇〇」など、職業のわかる呼び名が普通だった。ここ数年で昔語りしてくれる人も減少、地域の伝統をつなぐ取組が必要。

現地で対応して下さったみなさま

鹿角

鹿角市教育委員会：工藤 海氏
丸岡 歩氏

一戸

一戸町教育委員会：山田 晃氏
後藤 宗一郎氏

東北歴史博物館

小林 直輝氏

小野染彩所

小野 信明氏（代表）

永勤染工場

永野 仁氏（会長）
永野 仁輝氏（代表取締役）
猪俣 鉄平氏（製造課課長）

熊谷

熊谷市商業観光課：斉藤 正人氏
熊谷市立熊谷図書館：大井 教寛氏
蔵持 俊輔氏
熊谷市立江南文化財センター：森田 安彦氏
NPO 法人熊谷染継承の会：大久保 伯男氏（代表理事）
関根 とし子氏（理事）

三木

三木市立みき歴史資料館：金松 誠氏
川上 万尋氏
三木市市史編さん室：小澤 みのり氏
神戸新聞社北播総局：大山 伸一郎氏
ギャラリー湯の山みち：筒井 俊雄氏（館長）

熊谷

- 型染めに係る資料・道具類の整理・保存
・熊谷市立熊谷図書館
⇒相互に連携し、熊谷染の保存・活用に取り組む。

三木

三木市立みき歴史資料館

- 「三木の染型紙の保存と活用を考える会」
10年以上前、筒井氏中心に有志で結成。
作品集「三木の染型紙」第1～3号(2013/2014/2016)を発刊するのが解散。

(2) 他分野(特に商工、観光)との連携によるデザインの利用促進/商品化といった取組を通じた生活への落とし込み

① 他分野との連携事例

熊谷

- 次年度、高校生と熊谷染の商品開発を検討中(喜多方市の会津型×高校生の取組を参考)。

三木

- 都市政策課「湯の山街道」活性化事業の一環で、型紙デザインを施した灯笼を活用。
市内在住の米澤氏(大工)が祭りの盛上げに制作、市に寄付したのが最初。
米澤氏は業者との繋がりも深く、東京の見本市等での制作キット販売も検討中。
- ふるさと納税の返礼品とする案もあり、「縁結び課」と協議中。
- 市内ホテルの内装リニューアルに際し、地元に関わるインテリアとしてHPより申し出。担当のインテリアコーディネーターが来訪、企画提案の結果採用。

② 伝統的なものに新たな視点や要素を取り入れる際のポイント

小野染彩所

- 江戸時代の伝統柄(向い鶴・千鳥等)を受け継ぎつつ、色合わせ等を変えて展開。

永勸染工場

- 会長の前職は貿易会社勤務。PCには慣れており、アナログからデジタルへの移行はスムーズ。

熊谷

熊谷市スポーツ・文化村「くまびあ」

- 見学や体験会の他、熊谷染デザインを利用した本の装丁、熊谷市の鳥瞰図を染めた作品製作等。
⇒カッティング機器・専用ソフトでの型紙作り。
- 熊谷市出土の埴輪が東京国立博物館博で展示。記念品として手拭いを制作。地域資源とのコラボが大変好評。
- 代表大久保氏が精力的。フロッピーディスクの時代からフォントのソフトを導入し型紙作り。

三木

ギャラリー湯の山みち

- ギャラリーは型紙の他、化石や算盤等の収集資料を展示。まちの魅力を掘り起こしに繋げたい。
- 1階は、型紙とデザインが一致する古布を展示。藍染の布は古道具屋に依頼。完全に一致するものを見つけるのは大変な苦労。
⇒会津型は東北一円が販売圏である等の理由から、柄が一致する古布は見つけづらい。地道な活動成果。
- 三木のまちの写真をもとに型紙を彫り、染めた作品も展示中。

(3) デジタルアーカイブ化の推進

① 型紙データの整理・活用について

熊谷

熊谷市立熊谷図書館

- 寄贈受入資料13件中、9件はデータ化済。
- 県と共同で国のジャパンブランド育成事業に取組もうとした経過あり(断念)。
- イベント出展、企業や大学等での製品展示で型紙デザインをアピール。
⇒デザインと製品の両方で活用の可能性を周知。
- 市は型紙デザインの「所有権」のみ保持(会津型も同様)。ただし製品には商標権等の保護が可能。

三木

三木市立みき歴史資料館

- 市指定「筒井俊雄氏所蔵染紙」をはじめとするデザインの活用を推進

② デジタルアーカイブサイトの整備・運用について

熊谷

熊谷市立熊谷図書館

- 「DNP デジタルアーカイブ」に登録し有料DLの仕組みを整備。その後無料DL可の「熊谷デジタルミュージアム」(市運営)展開。
- 「熊谷デジタルミュージアム」は、博物館をバーチャル空間に作ろうと開始。市町村合併後、全地区の文化財を紹介できるようコンテンツを増加。
- サイト運営費は、サーバーのランニング費用のみ。情報の更新は職員が適宜行う。
- 型紙デザインの利用条件⇒「熊谷染型紙」のロゴ明示のこと

三木

筒井俊雄氏

- 「播州三木染型紙 WEB 美術館」の開設。
【目的】館長筒井俊雄氏の地元三木産染型紙の収集と研究・展示活動を補完。
・三木の型紙製造業が忘れ去られる現状を憂慮し、筒井氏が自宅をギャラリーとして十数年経過。
・民間の小規模な展示施設では認知が広まらないため、ネットを利用したPRを目指す。
- 「播州三木染型紙 WEB 美術館」の運用。
試行期間を経てR4.3より正式公開。
【サイト制作】事務長筒井信一氏(筒井氏甥)が本業の傍ら実施。
【費用】立ち上げはボランティア。運営費：サーバーレンタル料、ドメイン更新・管理費。
【デザイン使用料】館所蔵の型紙デザインに関して、使用料の取り決めなし。
⇒申出がある場合、筒井氏と適宜交渉。

(4) 他分野との連携を持続的に/次代へ繋げていくための仕組みの検討

① 協議会・コンソーシアムなどの形成

熊谷

熊谷市立熊谷図書館

- 熊谷染のブランド化…熊谷染継承の会の久保氏と協議。①場所 ②技術 ③所属 ④製品の定義づけ。
・「熊谷染」一番厳しい条件
⇒熊谷染継承の会で技術習得し、県より「熊谷染の伝統工芸士」認定者が、熊谷で染めた反物。
・「熊谷染」妥当な条件
⇒「熊谷染の伝統工芸士」認定者が染めた製品。
- 熊谷染の価値を守るため、定義付けを検討。
- 地域団体商標の登録を目指し、デザイン利用の審査等を担う委員会を組織。審査を通過した製品に熊谷染の表記を許可する流れを作ったが、現在登録取下げ。

② 型紙や文化財の所管課からスタートした事業が他分野で根付いた事例

熊谷

熊谷市立熊谷図書館

- 東文研の無形文化遺産部との共同研究(「お道具バンク構想」を下地:H26～27)
⇒染屋3軒の染工程の映像化、各工場の平面図作成。シンポジウム開催。報告書2冊発行。
- 東文研「お道具バンク構想」
⇒伝統工芸に関わる道具類を残し、後世の職人育成への活用を目指す。
- 大久保氏の工場から市立女子高跡地(現くまびあ)へ、近代化遺産として道具や機械類の移設計画。
- ポーラ文化振興財団の助成により、大久保氏工場から回転台、蒸し器、水洗機を移設。「熊谷伝統産業伝承室」として、熊谷染継承事業を継続。

三木

三木市立みき歴史資料館

- 型紙は、金物より先に地域産業として隆盛した。他課と連携し活用する取組も最近増えている。

その他

鹿角

〇デザインの使用について

- 型紙は報告書作成時にすべてデータ化。使用の問合せは年1回程度。商品化はまだ。柄はデータを提供して使用後は消去してもらう条件。

② 型紙調査・文化財指定に係る背景・きっかけ等

鹿角

- 染屋（廃業）より寄贈。
- 花輪のアーケード街周辺に、江戸～明治期は10軒程染屋あり。かつて鉱山労働者の作業着として需要。現在染屋は1軒で仕入れ販売のみ。
- 6柄に分類、さらに大中小に区分。赤外線調査も実施。文化庁・岩手県立博物館・福島県立博物館の調査、江戸小紋の重要無形文化財保持者から指導。

一戸

- 南館家所蔵の型紙群。H8 情報提供、H15 調査。報告書に選定分はデータ化。
- 専門職員がおらず、県博の支援調査委員中心に指導を受け調査。彫り方で分類し報告書作成。文化財未指定。
- 町指定「浪岡家の型紙」(H4 調査・個人蔵)は、元染屋で古文書資料あり。寛政期には染屋が6軒、馬で新潟方面へ行商との記録。
- 一戸は和蠟燭の原料（漆蠟）の産地。若松へも販路を持ち、流通・往来ルートに共通性ありか。

熊谷

熊谷市立熊谷図書館

- 廃業のため型紙や道具類の確認・寄贈等の相談を受ける。聞き取り調査や整理後に報告書を発行。
 - 岸家は、写真製版技術の特許を取得。デザインや技巧性は国内屈指。
- ⇒熊谷染に関連する調査研究の基礎資料になるとして、市有形民俗文化財に指定。

三木

- 江戸～大正期、湯の山街道沿いに型屋が数件、市内には染屋も存在。
- 三木は地紙生産に必要な柿が豊富で年貢の対象にも。漁網の腐食防止に柿渋の加工技術も持つ。
- 昭和末頃より筒井氏が型紙収集を開始。平成に入り当時の美術館長が個人所有の型紙調査を実施。
- 市内最多のコレクション「筒井俊雄氏所蔵染形紙」→1,242点、市有形民俗文化財。R7.1 調査報告書発行。
- 指定外の型紙も保存（三木市立堀光美術館蔵・個人蔵）。「三木の染型紙の保存と活用を考える会」で独自の目録の作成歴あり。

③ 紋柄デザインの特徴、地域性

鹿角

- 幾何学・植物・縞柄が多い。大柄の傾向。
- 秋田市・横手市・白子・江戸（神田）等の商印。

一戸

- 由来不明で未完も多い。型紙屋は1軒。鈴鹿市の文書や商印等から特徴や地域性、流通が見えるか。

小野染彩所

- 南部家家紋「向い鶴」。不來方城（盛岡城）の瓦や旗等、様々なバリエーションで展開。
- 「千鳥」も古い紋柄。

永勤染工場

- 同柄でもデザインが少しずつ異なる。50年前は全部手書きだが、現在は家紋専用の画像処理ソフトを使用。
- 染め直しの依頼が多い。デザインを整えたり、色の変更のオーダーもある。

熊谷

熊谷市立熊谷図書館

- 下請製造として発展。紋柄の偏りもなく技法も全国の型染めと同様。江戸小紋の流れをくみ普段使いの着物。
- 「団扇」「桜」は一般的なモチーフだが、熊谷の名物としてよく使用される。

三木

三木市立みき歴史資料館

- 本家の伊勢に対し近畿～四国方面の市場を争う。御三家紀州藩に対抗し、独創的なデザインを多く生み出した。美術的価値は本家に劣らない。
- 型紙は複数枚で構成され、関西らしいユーモアや皮肉的（戦争批判等）なデザインが特徴。
- 明治以降の西洋化紋様や「耕風」デザインは会津型にも共通する要素。
- ユーモラスな生きものや大津絵、三木名産の算盤等、地域性を感じるデザイン。

ギャラリー湯の山みち

- ほぼ同一デザインの型紙でも、モチーフや細かい表現等が異なる。

三木

- 微妙に改変を加え、デザインの独自性を主張。
- 文化庁調査官からは「小濱屋」の型紙が最も良質との評価。

④ 活用の取組

鹿角

- 実物の型紙を使用し藍染めした浴衣地あり。
- 「秋田の染め文化」を知って学んでもらうため、小中高で染め体験を実施。
- ・企画展に関連し染め講座（講師：染色家）。
- ・蔘藍を種から育て、翌年に染められるよう種をプレゼントする企画は大人気。
- ・R2 にハンガリーの藍染め展を開催。

一戸

- 型紙の企画展前後に体験学習を実施。図録作成。
- 博物館「藍染カレンダー作り」。糊置きして布に型染め、生葉を使った藍染め等。
- 博物館玄関のカーペットは南館家の型紙デザイン（№224）。

東北歴史博物館

- 民俗分野のテーマ展「染めの型紙」開催。型紙や染め物を通し、型彫りと型染めの技を紹介。
- 常設展は「型紙とそれで染めた反物」展示。
- テーマ展関連事業で型彫りWSを実施。伝統的な4技法を再現し体験できる内容（講師：小林氏）。

小野染彩所

- 数年前、学生達がパネル制作。型を彫り染めるWS実施。
- 市の企画「盛岡小さな博物館」。まちを博物館に見立て各店舗で展示等。HPで要確認。

熊谷

熊谷市立熊谷図書館

- 図書館で企画展を実施（過去4回）。

熊谷市スポーツ・文化村「くまびあ」

- NPO法人「熊谷染継承の会」のWS等。
- ⇒ほぼ毎週体験可。スケジュールをHPに掲載。
- 小学校への出前授業等。
- 熊谷染デザインを活用した商品展開。
- 東京国立博物館の特別展「はにわ」記念品としてミニ風呂敷を制作。熊谷で出土した「埴輪 踊る人々」をデザイン。観光協会やイベントにて販売。
- 会津型研究会との交流がある。

三木

三木市立みき歴史資料館

- 資料館主催の企画展を定期的で開催。
 - H10・H29 に姫路市書写の里・美術工芸館にて企画展開催。「三木の型屋 解説書」発行。
 - 型紙のデザイン使用の要望に対して、所有者（筒井氏）と都度交渉。
- ◎市所有の型紙（三木市立堀光美術館蔵等）は、他文化財と同様の申請形式か？
⇒今まで受付なし。市のイベントや広報物等にデザインを使用する場合は、申請等なく掲載。

⑤ 関連する諸団体・組織等

鹿角

- 型紙や型染め関連の団体はなし。
- 鹿角紫根染、茜染が有名で鹿角紫根染・茜染研究会が伝承・発信に取り組みほか、鹿角高校家庭クラブの鹿角茜染伝承隊が活動する。

一戸

- 「アイを育む会」代表が亡くなり活動停止。
- 「藍の会」（ボランティア団体）が博物館でグッズ販売。藍を育て染めたスカーフ等。
- 伝統的な染めの指導者はいない。草木染め・藍染め体験は職員が講師。

熊谷

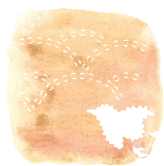
熊谷市立熊谷図書館

- 製品、技術、デザイン利用
- ・NPO法人「熊谷染継承の会」
- ・市商業観光課（観光協会含）

(1) 型紙としての価値の再整理 / その魅力を損なわない活用方法の検討、及びその周知

① 現在の保存・管理状況

<p>鹿角 藍染の型紙 秋田県鹿角市</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●市教委所蔵。歴史民俗資料館にて令和2年度企画展「藍染めの型紙と鹿角の紺展」開催。型紙展示は常設で、2週間に2枚ずつ柄を入替。 ●収納棚(引出し収納)に10枚程度分けて保存・管理。 ●型紙1枚ずつファイル。表面に情報記載。 ●商印は目視確認が可能なものが多く、一部目視不可のものもある。重ね捺しもある。
<p>一戸 南館家の型紙 岩手県一戸町</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●町教委所蔵。彫り方別に大別する程度でほぼ未整理。1枚ずつ包み重ねて保存。 ●破損や劣化も多い型紙。
<p>東北歴史博物館 宮城の型紙 宮城県多賀城市</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●博物館に染屋由来の型紙収蔵。整理・調査カードは作成＋データ化済(webで閲覧できる資料目録に未反映の資料もある)。すべて未指定文化財。 【新田家】寄託→調査(のち寄贈)→報告書作成。追掛型が分散し照合難化したものの、ほぼ全ての組が揃っている。中型が多い。 約2,000点中会津の商印入りは82点。 【最上家】常盤紺型染め。制作・使用年代は様々。仙台市博でも所蔵あり。 【富倉家】「紋屋さん」紋専門の染屋。 【菅原家】石巻市。型友禅の型紙が多い。 【庄司家】角田市。絹地向けの小紋が多い。会津の商印は5点程。 ●染屋7家の開業時期で、型紙のおおよその時代区分が可能。傾向の分析等は今後の課題。
<p>小野染彩所 南部の染屋 岩手県盛岡市</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●高齢化による廃業に伴い30年程前に組合が解散。元は地域に多くの染屋あり。 ●型彫り～染めまで一貫作業。 ●元型は原本として残す。製品別に使い分けのため型は何千枚にも。紋柄別に整理済だが未データ化。型紙は壊れるまで使用し廃棄せず保管。 ●伊勢から渋紙を仕入れ、型を彫った時期もある。
<p>永勤染工場 仙台の染屋 宮城県仙台市</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●南染師町の染屋は現在永勤1軒。名入れや任意の模様を中心に、ニーズに応える製品作り。 ●会長である永野氏の幼少期は町の8割程が染め仕事関連。染屋も15-20軒近く存在。 ●30年前は図案師等の専門職人がいた。 ●祭の半纏等、戦後に需要が増加。 ●青山染工場(廃業)初代社長は、戦前北海道へ行商。永勤で請負も。 ●S25頃に工場建設。H20に建物の修理。屋内に干場設置。 ●湿度管理の見極めがかつては職人の仕事だったが、今はエアコンでかなり楽。 ●手彫り時代の型紙はほぼ処分。昭和期は年1回、伊勢から型紙(渋紙)売りに来た。
<p>熊谷 熊谷染 埼玉県熊谷市</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●熊谷染には、技を受け継ぐ「製品」、歴史を踏まえた「文化財」の2つの定義あり。 ●製品や技の継承、デザイン活用は「熊谷染継承の会」と市商業観光課(観光協会)が中心に管理。 ⇒商品、記念品等をはじめデザイン多数。 ⇒熊谷染本来の姿「着物」を売出すべく、反物の受注販売も検討中。 ●寄贈の熊谷染関連資料は文化財扱い。市立熊谷図書館で調査・整理・保存。 ⇒収集資料総数は約36,000点。整理後に報告書発行(4冊)。会津型報告書も参考。 ⇒旧所有者への聞き取りや型の分類方法等も記録。 ●岸家資料を先行して市文化財指定(H30.3)。他資料の追加指定も検討中。 ●図書館内の企画展示室で、過去に企画展を4回実施。
<p>三木 三木の染形紙 兵庫県三木市</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●三木の染形紙…1,242点(市指定文化財)筒井俊雄氏所蔵。今後も保存・公開の取組を継続。 ●「ギャラリー湯の山みち」で収蔵・展示の染形紙の複写版はその数倍の量。 ・播州や丹波、県内外の型屋・紺屋の所蔵で、筒井氏が三木産と確認した形紙を複写。 ・10年以上前のことで現在の有無は不明。散逸の可能性も。美術的に価値の高い秀作もある。



令和6年度 喜多方市文化芸術創造都市推進事業
「ひろがる」みんなの会津型プロジェクト
旅する会津型 記録集

視察調査 木幡江里子、蓮沼優介、江畑芳
編集 木幡江里子、関川麻起子、江畑芳
テキスト 木幡江里子、江畑芳
デザイン 江畑芳
撮影 江畑芳
印刷 北斗印刷株式会社
発行 喜多方市教育委員会 文化課
〒966-8601 福島県喜多方市字御清水東 7244 番地 2

令和6年度 福島県地域創生総合支援事業（サポート事業）

喜多方市教育委員会 文化課